

コンテナ内で作物栽培

パッケージ化、販売目指す

総合物流サービスのホンダロジコム（本社春日井市八田町5の16の6、本多敦社長）は、名古屋大学発の農業系スタートアップ・TOWING（トイーイング、本社名古屋市中区）と連携し、輸出用コンテナを使った作物栽培に取り組んでいる。トイーイングが開発した土壌改良剤「厩炭（そらたん）」を利用し、コンテナ内で主食となる作物を栽培する。将来は、コンテナをパッケージ化して販売することを目指しており、食料自給率の低い国の課題解決などにつなげていきたい考えだ。

ホンダロジコムは2020年からトイーイングと連携を開始。21年、物流以外の事業を推進するネオバリユークリエーション部を創設

ホンダロジコム×トイーイング

し、共同でコンテナ栽培実験をスタートした。コンテナの大きさは、長さ12尺、高さ2・4尺、奥行き2・4尺。内部に棚を設け、袋や箱を使ってジャガイモなどを栽培している。

厩炭は、もみ殻や茶殻、畜ふんなどを炭にしたものに、有機肥料の分解を早める微生物を混ぜて製造する。農業の脱炭素化につながるほか連作も可能になるため、多方面から注目を集めている。

現在のジャガイモの収穫量は、1株当たり800〜900g。露地栽培の7割程度というが、コンテナでは多段栽培ができることや、露地では不可能な年4回の収穫が可能となり、露地より優位な点も多い。同事業を担当するネオバリユ

栽培実験を行っているコンテナ



ークリエーション部スマート農業推進グループの菊池健太郎主任は「露地と同程度まで収量を上げるため、施肥のタイミングや散水頻度などの研究を進めている」と説明。今後は、高単価が見込める「食用花」の栽培も並行し、採算性の向上を図っていく。

同社は、トイーイング以外にも複数のスタートアップと連携し、既存業務の効率化や新規事業を推進している。菊池主任は「スタートアップとの連携は、互いのリソースが限られていることが課題となるため、双方が柔軟に対応することが重要」と話す。

其創時代

収穫したジャガイモ



（尾東・天野が主筆）